

スギウラ株式会社

〒370-0006
高崎市問屋町 2-2-8電話番号
代 表
027-361-5808
営業1課
027-361-5734
営業2課
027-361-5780Fax
027-361-1272当社 Web サイト
www.kamisugiura.co.jp

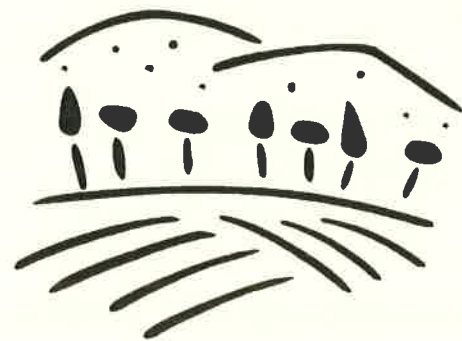
そして曲の主役は盲目の皇子・蟬丸・・・ではなく、姉の逆髪(さかがみ)です。しかし逆髪だけでなく蟬丸も、本来主役(シテ)のみが着ける面を着けています。これはシテツレ(両ジテ)というこの曲の特別演出です。

物語は、盲目ゆえに逢坂山で出家させられた弟・蟬丸と、物狂いゆえに各地をさ迷い歩く姉・逆髪の再会と別れ、となっています。内容はこれだけですが、そこには当時、社会的に敗北者とされた人たちの、救いようの無い漂白の人生の寂しさ・無常感が内包されています。また逆髪の舞は「翔(かけり)」と呼ばれ、迷いや邪念・物狂いを表します。この翔や、そもそも「逆髪」の名も「坂神」つまり峠の守護神が元になっており、神仏を主役にした「協能」に近い構成です。

最後まで救いの無い曲ですが、そういった部分もまた神秘性を増す要素となっています。蟬丸の身分が雑色から皇子になったのも優美さ、哀れ深さを強調する意味も含まれるのでしょう。

この「蟬丸」は数ある演目の中でも人気があり、また難しい内容とされています。しかし本来、能は雰囲気を楽しむもの。震災の影響など、まだ暗いニュースも多い昨今ですが、一時その憂さを忘れ幽玄の世界に浸るのも良いのではないのでしょうか。

たかさき能HP →
<http://www.takasaki-nou.jp/>



お気付きの点や質問、疑問などありましたら、ご遠慮なく営業または、下記までお問合せください。

お問合せ
メールアドレス
sg-arai-yoshio
@kamisugiura.co.jp

ニュースレターQ

スギウラ株式会社 027-361-5808

特 集

- ・ 三菱製紙の現状について
- ・ 活字のはなし
- ・ 日本の色上質
- ・ たかさき能

三菱製紙の現状について

7月になりました。今年は例年に無く梅雨入りも早く、天気のスッキリしない日が続いています。夏至は過ぎたので日照時間は段々と短くなるわけですが、暑さはむしろこれからが本番。今年は館林と熊谷のどちらが日本最高気温を記録するのか？ 原発問題が片付かない中、夏の大停電は回避できるのか？ 計画停電は再実施されるのか？ 関心は尽きません。

すっかり定着したクールビズや打ち水、小紙先月号で紹介いたしましたグリーンカーテンなど、電気やお金を使わなくても、工夫次第で何とかなるかもしれません。私たちが出来ることをして、暑さを乗り切っていきたいですね。

さて、東日本大震災により被災した三菱製紙の八戸工場は、4月20日よりパワープラントが再稼動しました。そして約1ヵ月後の5月24日より白板紙、印刷・情報用紙の生産設備が1台づつ計2台、コーター（塗抹機）1台が生産を再開し、現在も順調に生産しております。

さらに6月19日より3台目の抄紙機が生産を再開しました。同工場の大型抄紙機で、印刷・情報用紙の生産機です。この機械の稼動により、生産量は震災前の約35%まで回復いたしました。

今後の予定としましては、7月8月と順次稼動する機械を増やしていき、本年度上期中（9月末）には抄紙機5台、コーター3台の生産を再開し、これにより生産量は震災前の約70%まで回復し、一部銘柄を除き八戸工場主力製品の生産体制が整う見通しです。

全ての抄紙機が稼動し、フル生産が可能となるのは、当初予定より1ヶ月ほど早まり、11月中旬頃になる見込みです。

皆様には色々のご不便、ご迷惑をおかけしておりますが、何卒ご了承くださいますよう、改めてお願い申し上げます。

その他詳しい話などは、弊社営業までお問い合わせ下さい。

活字のはなし

活字というと、よく「若者の活字離れ」などというように、印刷された文字を指すことが多いようです。しかし元々は文字を印刷するための、一文字ごとの判子（のようなもの）です。

記録に残る限りでは、11世紀中国の畢昇(ひっしょう)による膠泥(こうでい)活字が最古とされます。これは粘土に一字一字文字を彫り、焼いて活字にしたものです。最初の活字は陶器でした。彼の考案した印刷法に適していたため、陶器にしたと考えられています。

そして時代はずっと下って、世界に活字を使った印刷術が普及したのは、ご存知ヨハネス・グーテンベルクの活版印刷術の発明によります。活版印刷は火薬、羅針盤と並んで世界三大発明の一つとして数えられており、その発明による影響は計り知れません。

1455年、最初に印刷されたのが、後に「グーテンベルク聖書」と呼ばれるラテン語聖書でした。聖書が最初なので布教が目的かと思いきやそうではなく、純粋に販売目的でした。

価格は当時の平均的労働者の年収2年分という大変に高価なものでした。しかしそれでも写本よりは安価でしかも大量生産が出来たので、その意義はとても大きなものです。因みにこの聖書は2巻セットで、48セットの現存が確認されており、日本では慶應義塾大学に保管されています。

ゲーテンベルクはその後、借金の抵当として印刷機と活字、印刷中の聖書まで全て取り上げられてしまいました。とても偉大な発明をした人物とは思えない後日談を残しましたが、それでもその功績にはいささかのかげりもありません。

翻って日本での活字の普及はどうだったのでしょうか。

最初は西洋から持ち込まれたものでした。16世紀にイエズス会が教育や伝導のために印刷機を持って来ました。豊臣秀吉の朝鮮出兵の際にも、金属活字が持ち帰られたようですが、残念ながら両方とも普及までには至りませんでした。

江戸時代になり木版印刷（活字ではなく1枚1枚版木を彫る）が活発になりましたが、版が全て手彫りなのでコスト・利便性共に悪く、近代的印刷術の普及にはやはり明治維新を待たねばなりませんでした。

そして日本における活字の普及に大きな貢献をした人が、本木昌造という人物です。本木家はオランダ通詞（通訳）を家業としており、昌造は天保5年（1834）、11歳で養子となりました。

長崎の出島で通訳として働いていた彼は、鎖国中の日本で西洋の文化に触れ、その進歩に強い関心を持ち、技術を習得したいと考えるようになります。彼はオランダより持ち込まれた印刷機を活用できるよう願い出ました。そしてそれが認められ、長崎奉行所内に活字版摺所が出来ました。しかしそこではまだ全て近代活字というわけではなく、木版や輸入した欧活字（辞書などのためのアルファベット等）が使われていたようです。

事業は順調でしたが輸入活字は非常に高価で、規模が大きくなればなるほど経営は苦しくなっていました。結局、そこはわずか4年で閉鎖されてしまいました。同所が閉鎖された後も、本木は邦文活字の研究に取り組みました。

活字の母型を作る方法は、大きく分けて三つあります。パンチ法、電胎法(でんたいほう)、彫刻法がそれです。彼はまずパンチ法に目を付けましたが、楷書や明朝体など細い線を多用する邦文には向かず、耐久性に問題が残るため、日本ではほとんど普及しませんでした。

時は江戸最末期となり、彼は今度は活版技師ウィリアム・ガンプルに技術指導を求めます。困難を極めた活字製造は、ガンプルから直接電胎法を学ぶことによって、ようやく完成しました。(電胎法の原理自体は非常に難しいので、説明は割愛します。)本木は明治の日本を担う若者を育てたいと思ったのでした。そのためには西洋の進んだ知識、技術を習得する必要があります。その知識をあまねく伝播するため、どうしても活版印刷術が必要と考えたのです。

活字製作に情熱を燃やしたのは本木だけではありません。版木師・木村嘉平もその一人です。彼もオランダ人から教えを受け、やはり電胎法で活字を完成させました。後ろ盾である薩摩藩・島津斉彬の急逝にも関わらず不断的努力を続けた結果でした。しかし極度の近視となってしまう、出版事業にまでは至りませんでした。

もう一人は島霞谷(しま・かこく)です。画家・写真家としても名を残した島霞谷ですが、彼は簡便なパンチ法で活字を作ろうとしました。その結果完成した、父・母型に木を用いた霞谷独特の鉛鑄造活字によって、科学書や医学書が出版されました。

彼らの努力・研究により日本でも活版印刷術が普及し、その後の明治期の文明開化・富国強兵に寄与しました。

現在では平版(へいはん、オフセット)印刷が主流になり、活版印刷はあまり使われなくなりました。

しかし日本、そして世界で文化・芸術・学問等々が幅広く普及することに、活版印刷が大きな役割を果たしたことは間違いありません。

日本の色上質

先般の東日本大震災では、ご存知のように製紙会社も大きな被害を受けました。

特に影響が大きかったのが、前述の三菱製紙と、日本製紙です。

日本製紙は色上質の主力生産工場であった石巻工場の被害が大きかったため、先日、一部銘柄の生産休止が発表されました。

・ 淡象牙 ・ 肌 ・ 白茶 ・ 濃クリーム
・ もえぎ ・ みどり ・ 若竹 ・ 水
・ ブルー ・ うす水 ・ むらさき
・ 薄紅 ・ サーモン ・ だいたい
・ しろ ・ 銀鼠

以上の16色が、当面生産休止となります。生産が完全に再開されるにはまだかなり時間がかかると思われます。

しかし弊社では紀州色上質、大王色上質も取り扱っておりますので、何なりとご相談下さい。

皆様には色々のご不便、ご迷惑をおかけしておりますが、何卒ご了承くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

その他詳しい話などは、弊社営業までお問い合わせ下さい。

たかさき能

毎年公演が行われております「たかさき能」についてです。高崎の観音様建立50周年を記念して始まった催しですが、今回で第26回となります。

日程は9月10日(土)で、例年は10～11月の秋の深まった頃に実施されていましたが、今年は群馬ディスティネーションキャンペーン(DC。期間は7/1～9/30)に合わせる形で、早い時期での開催となりました。

因みにDCとは「JRグループ6社と地域(地方公共団体や県民・企業等)が一体となって取り組む、全国から誘客を図ることを目的とした国内最大規模の大型観光キャンペーン」(群馬DC公式HPより)です。

今年の演目は「蟬丸」。演ずるは今年も観世流能楽師、56世梅若家当主・梅若玄祥です。昨年

「翁」の神舞を見事に舞った氏が、今年も素晴らしい演舞を見せてくれることでしょう。

たかさき能は通常、群馬音楽センターで行われますので、公演当日に能舞台が造られます。しかし本格的な能楽堂は、まず入ると建物の中なのに舞台にも屋根がしつらえてあることに驚きます。これは以前能舞台が屋外にあった名残で、例えば靖国神社の能舞台などは、舞台に屋根はありますが客席にはありません。そのため雨の日には観客が合羽を着ているという光景が見られます。現在のような、能舞台が屋内に作られる様式は、明治以降のものです。

因みに舞台の天井には滑車が備え付けられており、これは「道成寺」という演目でのみ使われる設備です。屋根が作られないたかさき能では、道成寺の上演は難しいかもしれませんね。

弊社は企業文化活動の一環として「たかさき能」に積極的に協賛し、
実行委員会の一員として運営に携わっています。